

はじめに

永い伝統を有する考古学の瓦研究にあって中世瓦の研究は1990年代になって研究が活発になった比較的新しい分野である。1970年代後半から1980年代前半の東日本においては鎌倉の極楽寺、鶴岡八幡宮、覚園寺などの境内における発掘調査で中世瓦のまとまった出土があり、また鎌倉以外でも静岡県菰山町(当時)の願成就院、群馬県尾島町(当時)の長楽寺、茨城県筑波町(当時)の日向遺跡における中世瓦の出土は先駆的な事例であった。さらに神奈川県鎌倉市の永福寺跡や栃木県足利市の樺崎寺跡で国指定史跡の環境整備事業にともなう発掘調査が継続的に実施され、多量の瓦が出土するようになった。

資料の蓄積が進むにつれて中世瓦研究への取り組みが動き始めたのであるが、初期には個人で、次第に数人のグループで資料の所蔵機関に向いて瓦を観察し、手元の資料との比較検討を行い、瓦への理解を深めていった。だがしかし、個人を中心とした取り組みだけでは中世瓦の研究は遅々として進まなかった。

そこで資料の共通理解を図るとともに意見交換の場を設けることを目的として、平成6年に中世瓦研究会を結成した。研究会は神奈川県(鎌倉市)からスタートして、栃木県(足利市)、埼玉県(本庄市)、群馬県(北橋村)、茨城県(土浦市)、静岡県(菰山町)、東京都(府中市)、千葉県(館山市)、京都府(京都市・宇治市)で毎年研究会を開催し、平成14年まで9回の研究会を重ねた。常連のメンバーを中心に毎回20人程度が集まり、開催地のメンバーによる事例報告と主要な資料の観察を行った。気がつくや徐々にその輪が広まり東北、北陸、関西、そして沖縄からも熱心な参加者が集まっていた。名称こそ研究会としているが、自由な雰囲気意見交換を行う勉強会が中世瓦研究会の姿である。研究会の当日には車を連ねて瓦が出土した現場の見学にも出かけた。遺跡の立地や周辺の地形を確認し、河川や道路などとの位置関係を理解することは非常に有効であった。瓦を手に取り、「これは〇〇技法ですね」、「いや違う、△△技法だ」といった会話を交わし、「報告書に載せる時は、ここを実測図に表現してほしい」といった注文までしたこともあった。研究会の場で瓦の実物を観察し、その製作技法や胎土の特徴などを確認し、共通認識を構築する手法が効果的であるとされていることに安堵している(上原真人『瓦・木器・寺院』すいれん舎、2015年)。

この間、平成12年(2000)、中世瓦の研究に“世紀末の衝撃”とも言うべき大きな画期が訪れた。山崎信二氏による『中世瓦の研究』の刊行である。氏の研究は5年の歳月をかけて全国の中世瓦を観察し、瓦の製作技法や形態変遷から瓦の前後関係をみる方法に拠るものであり、特に丸瓦の製作技法について重点的な研究を展開したものである。統一的な視点からの観察により論じられた労作である。山崎氏も何度か中世瓦研究会に参加し、東国の研究者も直接に教示を受ける機会に恵まれた。山崎氏からの教示が大変参考になったことは事実であるが、瓦の年代についてはどうしても山崎氏の年代観が東国の中世瓦にはしっかりと符合しないことに気がついた。こうした印象は東国のみならず中世瓦

はじめに

の研究に取り組んでいた各地の研究者が少なからず感じていたものであった。確固たる視点による考察とは別に、各地で構築した中世瓦の編年や技法の変遷にも一定の根拠は存在している。“世紀末の衝撃”を受けて各地で従前の研究についての見直しが始まり、中世瓦の研究は新たな段階へと進化する状況になった。

中世瓦の研究が着々と蓄積され、考古学における瓦研究において、ようやく一定の水準に達したことは、最近出版された瓦の研究書(有吉重蔵編『古瓦の考古学』ニュー・サイエンス社、2018年)に中世瓦についての章が設けられ、そこに多くのページが割かれたことから認められる。

本書の第1部は東日本を9つの地域に、また第2部は西日本を6つの地域に区分して全国15の地域における中世瓦の様相をまとめた。さらに第3部は瓦当文様、瓦生産などをテーマとした4つの論文で特論を構成した。論考の内容は各執筆者に委ねたため、必ずしも本書全体の記述は統一的な体裁になっていない。古くからの中世瓦研究会のメンバー以外にも中世瓦に造詣の深い各地の研究者、新進気鋭の若手研究者にも執筆陣に加わっていただくことができた。

今回、取りあげることができなかった地域にも、資料の多寡を問わず中世瓦が存在している。たとえば、山城(京都府)はあまりにも膨大な資料があるため、かえって地域の様相をまとめることが難しい状況になっている。紀伊・備前・備中・備後・周防・讃岐・土佐・豊後・能登・信濃などにも重要な中世瓦が確認されている。これまで中世瓦研究会が東日本を中心に活動してきたこともあって、西日本の中世瓦を十分にまとめられなかったことは、ひとえに編者の不徳の致すところである。本書が中世瓦に関心を寄せる方々に少しでも益するものとなり、学界においてさらなる中世瓦研究の高揚を喚起するものになれば望外の喜びである。

短い執筆期間にもかかわらず原稿を書き上げてくださった執筆者の皆さんにお礼を申しあげるとともに、中世瓦研究会が初めて世に出す図書の刊行を快くお引き受けいただいた高志書院の濱久年さんに心から感謝を申しあげます。

平成31年4月30日

中世瓦研究会 小林 康幸